

メタ文明への問い

——ペルー農民運動の視点から——

一 はじめに——フジモリ政権下のペルーとセン

デロ・ルミノソン——

一九九〇年、六月、ペルーの大統領選の決選投票が行われ、アルベルト・フジモリ氏が日系人としてはじめてペルー共和国大統領の座に着いた。決選投票の二箇月前の四月、最初の投票が行われるまでは、フジモリ氏が大統領になろうとは全く考えられない状況だった。世界ペンクラブの会長まで勤めた高名な作家で、フレデモ（FREDEMO）、すなわちアクション・ポプラー（人生活動党）を中心として結成された民主戦線が推すバルガス・ヨサが次期大統領になるのではという観測が多かったように思われる。この年の始め、二月から三月にかけて、私は国際協力事業団の仕事でペルーにいたのだが、当時はフジモリを推すカンビオ・ノベнта（九〇年変革）のポスターも何か虚ろに見えたものだった。六月になってフジモリ氏当選のニュースを日本で聞いた。そ

松本亮三

の直後、六月末に再びペルーを訪れ、九月までの三箇月間先史学調査を行った。この頃はフジモリ政権が果していつまでもつのか、クーデターが起るのではないかとたいへん不安だったことを覚えている。当初フジモリは、モラリサシオン（道徳化・倫理化）を標榜し、構造的な政界汚職を一掃することを説いていた。また、フジモリは、年間七〇〇%以上のものをぼろインフレの抑制、IMFなどからの国外資金の導入、さらにはペルー国内を揺るがしているテロリズムや麻薬取引の撲滅と政情の安定、貧富の較差の是正などもうたっていた。一般国民はこれを歓迎し、当時はどこへ行ってもフジモリ人気が高かった。

このような民衆の期待も、七月二十八日に行われた大統領就任式直後の八月八日に、一時裏切られることになる。前任者のガルシア政権は、インフレの中であって生活基盤を保護するために、主要食糧をはじめとする生活必需品に対して価格統制を敷いていた。

ところが、フジモリ政権は、インフレ緩和の公約と期待を半ば無視して、小麦、米、パンなどの食糧を二〜三倍値上げし、ガソリンを三倍以上値上げすることを発表したのである。ガソリンは前政権下では異常に安く設定されていたので、今回の値上げにあつて価格は先進国の水準になった。ガソリンは国営企業なのでその値上げを国庫財政に反映させ、外債返済にあてて国家の対外的信用を回復するねらいがあつたが、国民の反発は大きかつた。しかし、フジモリ政権はこの危機を乗り越え、対外的信用をわずかに回復した。インフレも大幅には進まなかつた。国民に購買力がないうという現実がインフレを押しとどめたように見える。このような状況のなかで私はペルーを後にした。

翌一九九一年六月、私は再びペルーに渡り、前年と同様三箇月間北部の町で調査活動に従事した。この時は国内経済も落ち着きを取り戻し、ペルーの通貨であるインティ——現在はヌエボ・ソールレスタが当時はまだインティだった——の対ドル相場もほぼ安定していた。しかし、国内でのテロ活動・反政府ゲリラは、これまで例を見ないほど激化していた。それまでのテロ活動は、外国人に対しては特にアメリカ人に向けられていたが、フジモリ政権の活動が目立つにつれて、日本企業の駐在員や裕福な日系人をねらうようになっていった。日本人を狙うテロ活動は、すでに、一八七七年東京銀行リマ支店の沢木支店長銃撃事件に前兆をもつていた。不幸な事件はこの年の七月に起つた。リマの北のチャンカイで、国際協力事業団の専門家三人が射殺されたのである。これを機

に、ペルー各地にいた協力事業団の専門家も、海外青年協力隊の若い人たちも、また、日本企業関係者の多くも日本に引き上げ、外務省は渡航自粛を宣言することになる。渡航自粛が解かれたのはようやく今年に入つてからである。

このころ盛んに活動していたペルーのテロリストとは、センデロ・ルミノソソ（「輝く道」）と名乗る集団であり、アンデス中央高地のアヤクチュョを中心に勢力を誇つていた。その指導者はアビマエル・グスマンという。彼は、国立ワマンガ大学の哲学教授だったが、一九七〇年ごろ、ペルー共産党から分離独立し、近代の欧米的な先進主義に対して、むしろペルーの農民大衆による独自の共産主義を打ち立てるためには、武力闘争しか手段はないと考えた。一九七八年から地下組織を整備し、一九八〇年に大統領選挙妨害（投票所の襲撃）を企てて表面化する。一九八五年のアプラ政権以降、全国的に組織を拡大し、一九九〇年代に入ると、一万人以上の活動家を擁し、また、その一〇倍以上のシンパをもつ大勢力にのし上がった。活動家やシンパはセンデリスタと呼ばれる。センデリスタの活動が先鋭化してきたのは、このころからである。アヤクチュョにはセンデリスタを子供の頃から教育する組織（共同で暮らす村）も存在していること、時にはセンデリスタの子供を作るために女性を略奪することもあるという報道も度々なされた。中部山地のワヌコ地方に暗躍するコカイン製造組織と関係をつ結び、その潤沢な資金を利用してアメリカ製の武器をもつて活動を始めたことは、さらに国家的危機感を強めることとなった。

このほかにもゲリラ的左翼組織は存在する。チェ・ゲバラの影響を受けた、トバック・アマル革命運動(MRTA)も活動を展開していた。

一九九二年三月、フジモリ氏が来日した。上智大学で行われた名誉博士号の授与式と、帝国ホテルで行われたペルー大使館主催のレセプションに出席したが、この時、大統領は盛んにテロリズムと麻薬取引の撲滅の必要性を強調していた。特に上智大学の記念講演で、これらに対して敢然と立ち向かいペルーを正常化させるのであると、非常に恐い表情で語っていたことが、何か異常なことが起りつつあるのではないかという予感を抱かせた。テロリズムと麻薬取引の撲滅、構造的悪循環の中にある政治・経済の再建をめざし、ついに議会を閉鎖し憲法を停止する措置がとられたのは、そのわずか一箇月後のことであった。

その後ペルーを訪ねたのは今年の八月末であった。一週間ほどペルーを旅した。かつての様に数箇月住み着くような調査ではなかったため、表面的な様子しか分らないが、すでに危険な状態は過ぎたという印象であった。というのも、一九九二年九月、セネデリスタの最高指導者であったアビマエル・グスマンが逮捕され、MRTAの幹部たちも投獄されたからである。セネデリスタを収容するリマ近郊の刑務所は、かつては国家権力の及ばぬ、彼らの最重要基地と化しており、セネデリスタの記念式典や教練が公然と行われていた。このような事態ももう解消されたという。しかし、果たしてこれで問題は終結したのだろうか。現政権は、

このような運動を単にテロリズムやイデオロギー闘争として捉え、徹底的な弾圧で解決できると考えているが、このような余りにも深癖な姿勢は、まだ大きく国内に問題を残すのではないかと憂慮される。このような問題を理解するためには歴史を大きく遡らなければならぬ。

二、ペルーの農民運動の系譜

ペルーは多様性に富んだ国だと言われる。われわれが認識しなければならぬのは、それは、地理的に、つまり自然環境の上で多様であるばかりではなく、民族構成の上でも多様であり、その多様性が統一も理解もされないまま残っていることである。ペルーの地理は、一般にコスタ、シエラ、モンターニャの三つに大別される。すなわち、砂漠地帯を形成する海岸、冷涼なアンデス山地、そしてアンデス山地の向こう側のアマゾンへと至る暑熱の森林地帯である。ここに同じ文化を普及させ、国民的アイデンティティを形作ること自体大事業である。それにもまして、ここには多様な民族構成がある。スペイン人(ブランコ)、混血(メステイソ、ミステイ)、インディオ(ルナ)の文化的・民族的相違がある。これに加えてイタリア、ドイツなどのヨーロッパ系移民、中国、日本をはじめとするアジア系移民の一群があり、さらにこれらの混血がその民族構成を一層複雑なものにしている。

このような民族構成の複雑さは、一五三二年、アンデス世界を統治していたインカ帝国が、スペイン人征服者フランシスコ・ピ

サロに滅ぼされ、スペインの植民地に、正確に言えば、ペルー（ヌエバ・カステイリヤ）副王領となったことに起因する。この時を契機に、スペイン人とインディオ、そしてメスティーンという民族の基本的構成が作り上げられたのである。中央アンデス地域は、植民地化によって激しい文化変化を経験する。経済構造の変化は特に顕著で、それまでの労働税が物納ないし金納を基調とするヨーロッパの税制にかわり、実質的な増税となった。レドゥクシオン（集村化政策）によって土地利用形態が変化した。偶像破壊（エストラパシオン）がインディオの世界観を崩壊させ、さらには、ヨーロッパ起源の疫病が人口を減少させ、社会的基盤を崩壊させた。⁽¹⁾

このような変化に対して、インディオは二つの仕方に対応した。その一つは、かつての国家主体であるインカ王族が主導する抗戦であった。一五三六年、インカ王族はビルカバンバに逃れ、「新インカ国家」を作ってスペインと武力的に対峙した。一五七二年、トレード副王の時、最後のインカ王、トバック・アマルが捕縛・処刑されて、インカ国家は実質的に消滅した。⁽²⁾もうひとつの対応は、千年王国運動、あるいは土着主義運動と呼ばれる宗教運動の一形式である。十六世紀にはタキ・オンゴイ（病氣踊り）、モロ・オンゴイ（赤い病氣）などの運動が起こった。いずれも、スペイン文化を否定すれば、どんでん返しが起こってインディオの理想的世界が実現するという信仰を軸に展開されたが、植民地政府の弾圧にあって消滅した。⁽³⁾

タキ・オンゴイという名前で呼ばれる運動は、ワカ（インディオの伝統的な宗教において超自然的な存在あるいは超自然力を意味する）は一度キリスト教の神に敗れたが、やがて蘇りスペイン人が滅亡するという預言と、ワカが速やかに復活することを祈って行われる集団舞踏や、ワカの憑依とトランスを伴う熱狂的な儀礼によって特徴付けられる。当時クスコで布教にあたったモリーナ神父によれば、インディオの間で、スペイン人がペルーにやってきたのは、インディオを殺して脂をとり薬を作るためであるという風説が流れたという。⁽⁴⁾この風説を信じたインディオたちは、スペイン人に仕えるのを嫌がるようになった。そのころ、ある預言者が、「侯爵（フランシスコ・ピサロ）がこの地に来たとき、神がワカを、スペイン人がインディオを打ち滅ぼしたのだ。……いまや世界が逆転する時が来た。……今度は神とスペイン人が打ち負かされる番だ。すべてのスペイン人は死に、町々は洪水に見舞われよう」と説いた。ワカは、今まで何の供儀も捧げられず、ほおっておかれたため飢え渴いているので、人間の助けが必要とされ、インディオたちはスペイン人の偶像破壊者によって打ち壊され焼き捨てられたワカの断片を捜し求め、これに供物を捧げた。彼らはワカの上に布を乗せ、チチャ酒を注ぎ、サンク（とうもろこしのだんご）を供えてワカを呼び起こし、「ワカよあなたの庇護をお願いします。健康と子供とよき畑を恵みたまえ。インカの御代のごとく、ワカよあなたの懐に抱きたまえ」と祈ったと伝えられている。⁽⁵⁾

タキ・オンゴイは、一五六〇年代前半にアヤクチヨ地方で発生し、アンデス高地ではクスコ、アレキバ、チュキサカ、ラパスに及び、海岸に下つては首都のリマへも波及した。エクアドルのキートへも伝えられ、最終的には副王領全域に及んだとする報告もある。やがてこの中から、ビルカバンバ王朝を中心とする反スペイン勢力と結んで一斉蜂起を画策する者たちも出現したとも言われる。いずれにせよ、一五六五年にバリナコチャの司祭、ルイス・デ・オリベラによって発見され、カトリック教会と植民地政府の知るところとなり、首謀者たちは捕えられ処罰された。

その約二百年後、一七四二年から一七五二年にかけて、征服当時のインカ皇帝アタワルパの裔と称してフアン・サントス・アタワルパが蜂起し、一七八〇年と一七八一年には、同様にインカの末裔を名乗るトバック・アマルに率いられた反乱運動が起つている。⁽⁷⁾これらの反乱運動は、地方行政官であるコレヒドールの圧政に対する農民大衆の蜂起という形で現れ、土着主義という性格を離れた、あるいはそれを超えた対立の図式が頭わになつていゝ。このため、ややもすれば独立の前哨戦として評価されることもあるが、実際にはすでに見てきた十六世紀の反乱や土着主義運動の系譜をひくものであることに注意しなければならぬ。この後、かなり純粋な形で宗教運動が起つたことも知られている。一八一一年にはワンカペリーカのリルカイで、サンティアゴと名乗る男が現われ、これまでは氷と霰の不毛の時代であつたがワマニ（アンデス固有の山の神）の儀礼を行なうことによつて豊饒の特

代が到来すると説いたという。キリスト教の要素を幾らか取り込んでおり、長い植民地時代を通してシンクレティズムが進行してきたことを示している。宗教運動自体も変質の過程を経験したのである。

一八二一年、アルゼンチン生まれの、サン・マルティンによつてペルーの独立が宣言され、一八二四年、フニンとアヤクチヨの戦いで副王軍は完敗して、ペルー共和国が誕生した。独立戦争にはメステイソもインディオも参戦したが、この戦いはインディオの独立ではもちろんなかつた。ペニススラールス（本国生まれのスペイン人）に対するクリオリーヨ（植民地生まれのスペイン人）の独立であり、インディオにとつての「植民地状況」は変化せずに続き、ペルー諸地方でのインディオの反乱、武装蜂起はこの後も数限りなく起こることとなる。⁽⁸⁾

このような状況が続く中、今世紀前半に二人の思想家が生まれた。ホセ・カルロス・マリアテギとビクトル・ラウル・アイヤ・デ・ラ・トーレである。マリアテギはより思想家であり、アイヤはより活動家であるという相違はあつたが、ふたりは共にインカ帝国の政治・社会制度を理想化し、インディオを核とする「ペルー的なペルー」（マリアテギ）、「インド・アメリカ」特有の歴史をふまえた社会（アイヤ）を作り上げようとした。アイヤは、その理想をアブラ（APRA）すなわちアメリカ人民革命同盟として体现したが、理想が実現することはなかつた。

一九六三年、アクシオン・ポプラール（人民活動党）のフェルナ

ンド・ペラウンデ・テリーが大統領に就任すると、「理想化された」インカ行政を国政に導入した。大農園を接収し、インカ時代のアイニエを模範とした農業共同体を誕生させ、また、インカ時代の（賦役制度）に範を取って国家や地域の共同労働を促すコオペラシオン・ポブラール（人民協働体）を設立したのである。一九六八年、この試みはクーデターを起こしたフアン・ペラスコ・アルバラードによってさらに促進され、一九七五年からは、フランススコ・モラーレス・ベルムデーデス將軍によって受け継がれた。いわゆるインディヘニスモ政策である。一九八二年、軍事政権は民政に移行し、再びペラウンデが大統領となり、一九八五年にアブラ党が大勝利を得てガルシニア政権が成立する。このふたつの政権は、世界経済とインディヘニスモのはざままで苦慮しながら、インディオという先住民への配慮を「理念的」には忘れていなかったといえる。しかし、白人の側から提唱された新しい社会は、どのような制度を導入するにせよ、インディオ農民の経済的問題も、さらには民族的・文化的問題の解決ももたらすことはできなかった。農業共同体にせよ、人民協働体にせよ、インカ時代の理念が導入されたとしても、国家の枠組みは、白人が作り上げた完全にヨーロッパ近代国家のそれであり、またペルーを取り巻いているのは現代の世界政治と経済の醒めた状況ではないからである。インカの反乱とタキ・オンゴイに始まるインディオの抵抗運動は、農民運動という無色な「一般現象」としての姿の中に見え隠れしながら、五〇〇年の間続くこととなった。セ

ンデリスタなどの運動が沸き上がる基盤は十分に醸成されていたと言えるだろう。

三 メタ文明への問い

セNDERロー・ルミノッソやMRTA（トパック・アマル革命運動）の活動を、ガルシア政権は統御することができなかった。クリオーリョ国家として成立したペルーがインディヘニスモ政策を許容すること自体が矛盾であり、この矛盾はインディオやメステイソを基盤とした農民運動に徹底的な態度で臨むことを許さなかったのである。フジモリがテロ活動の鎮静化に成功した理由は一つしかない。すなわち、フジモリ自身がインディオにも白人にも、またメステイソにも属さない少数民族集団、すなわち日本人コロニーの出身であることに由来すると思われる。歴史的対立構造の外側にあつて構造内のどの極とも利害関係をもたないマイノリティーが、一時的な調停者あるいは宥和者として機能したという図式を考えることができるだろう。ペルーという国家が内包する社会構造自体の変換は決して起つてはいないし、根本的な解決は何一つなされていない。これまでみられなかったほど、徹底的な弾圧が行われただけと言つてよい。ペルーで問題となつている農民問題は、その根底に征服に由来する民族の問題をもっており、支配と服属、文化の扶植と喪失という植民地状況の問題を抱えている。民族の問題は、地域に根差した問題である。一般的に言う階級構造の問題だけではない。政府が国家内の特定の地域や

民族に根差して成立する限り、この問題は宥和させることも、また強硬に弾圧することもできない。いずれも自己否定につながるからである。フジモリがテロ活動に一応の終止符を打つことができたのは、調停者が、この問題特有の地域性も個性ももっていないからであったと言えるだろう。しかし、このような解決は、ペルーの民族・文化的問題を、農民問題というよりはむしろ現象的なテロ活動⇨暴力活動へとすり替えることで得られたものである。すなわち地域的・個別的問題を棚上げにして、一般論の中で事態を取束せしめたことにはかならない。

民族の対立は、おそらく人類の歴史とともに古いものであろう。しかし、ペルーについて見てきたような状況は、大航海時代以降にはじめて起ったものである。異民族を含む文明社会は大航海時代以前にももちろんあったが、それらの文明社会は、文明が周辺の開を蚕食することで成立したものであり、民族問題は個性と地域性をもっていた。しかし、ヨーロッパで生まれたひとつの文明が、他の文明をも蚕食し始め、一元的統合へと向う巨大なうねりを見せ始めると、民族問題は地球全体のシステムそのものの問題へと変質し、「一般化」されていくことになる。文明を蚕食して広がったこの新しいシステムを、仮にメタ文明と呼んでみたい。メタ文明は、言い換えれば現代文明を形成する中核である。メタ文明は呑み込んだものすべてを同質化しようとし、個別的な問題を「一般化」していく。そのため、民族対立も、またその調停も、地域性を離れた関係として起ってくるのである。ペルーの土着主

義運動が農民運動となり、マルキシズムと結びつき、極左運動的な様相を呈したのも、その解決が第三者の手によって、あくまで表面的な形態でなされるようになったのも、メタ文明の進行と歩調を合わせた展開であったように思われる。だが、民族に関わる問題は個別的な世界認識の問題であり、政治的あるいは経済的関係の中に解消されるものではない。ペルーの民族問題は今や出口を失って鬱屈していると考えなければならぬ。

民族と文明の問題は、現代のメタ文明の中で知らぬ間に歪曲されてしまった。この歪曲を越えて真の解決を見いだそうとするならば、歴史を遡りその根源を見極めるとともに、メタ文明としての現代文明の有り様を的確に捉らえることが必要である。人類社会はつねに地域性や個性の中にあつた。あらゆる現象から地域性や個性を取り払い、一般化を志向するメタ文明は超克されなければならぬ。超大国であつたソヴィエト連邦の崩壊、各地で噴出する民族主義は、メタ文明の行き詰まりを表しているのかもしれない。しかし、これを調和させ解決させるべき新しいシステムは生まれていない。メタ文明を超える新しい生存のシステムを、人間が自らの意志によって作り出すことが、今要求されているのである。民族と文明の問題も、こうしてはじめて明らかにすることができよう。

註

(1) 初期植民地時代にペルーの先住民がこうむつた社会・文化変化の分析は、Natan Wachtel, *La vision de vain-*

cue. *Les Indiens du Pérou devant la conquête espagnole* 1530-1570, Editions Gallimard, 1971 (邦訳は『池田二訳『敗者の想像力』岩波書店 一九八四年)に詳しく分析されている。

(2) 「新インカ国家」に関して、ペルローの歴史学者、G・ギモン＝キマン(Edmundo Guillen Guillen)が「インカ＝インカ」本側で書かれた史料を精査して、的確な記述と分析を行っている。寺田・加藤・松本・稲村訳『インカ最後の都ペルマペン』時事通信社 一九七七年『*Visión Peruana de la Conquista*, Editorial Milla Batres, 1979. 』歴史記述本側で書かれた史料を精査して、的確な記述と分析を行っている。寺田・加藤・松本・稲村訳『*Versión Inca de la Conquista*, Editorial Milla Batres, 1974. 』同様に、キマンの史料を精査して、Luis Millones Santa Gadea, *Un Movimiento del Siglo XVI: El Taki Ongoy*. (En) *Ideología Mesiánica del Mundo Andino*, antología de Juan M. Osio A, Edición de Ignacio Prado Pastor, Lima, 1973, pp. 83-94. 』同書本巻の44頁『Nuevos Aspectos del Taki Ongoy, ibid. pp.95-102』に、また『未編纂史料と関係論』本巻集巻の『Luis Millones Santa Gadea (comp.), *El Retorno de las Huacas: Estudios y Documentos del Siglo XVI*, IEP y SPP, Lima, 1990』に記述があった。また、ギモン＝キマンの『Moro Ongoy [Onkoy]』と『Taki Marco Curatola, El culto de crisis del "Moro Onkoy", *Etnohistoria y Antropología Andina*, editado por

M. Koth de Paredes, y Amalia Castelli, Lima, 1978, pp. 179-192』に本巻に依拠した。

(4) Cristóbal de Molina (El Curzueño), *Relación de las fabulas i ritos de los Ingas hecha por Cristóbal de Molina, cura de la Parroquia de Nuestra Señora de los Remedios, de el Hospital de los Naturales de la ciudad de el Cuzco, dirigida al Reverendísimo Señor Obispo don Sebastian de el Arttaum, del Consejo de Su Magestad.* (en) *Fabulas y Mitos de los Incas*, edición de Henrique Urbano y Pierre Duviols, *Cronicas de América* 48, Historia 16, Madrid, 1988, pp.47-134. 本巻 pp.129-134』に Taqui Ongoy の報告がある。

(5) ibid. p.130. []内は用者。

(6) ibid. p.131.

(7) Eudoxio H. Ortega. *Manual de Historia General del Perú*, Ediciones los Andes, Lima, 1979, pp. 211-228. 『寺田和夫『インカの反乱』筑摩書房 一九六四年 (思泉社より一九九二年復刊)』。

(8) 「植民地状況」という用語は、G・ミンランディエ著、井上兼行訳『黒いフリカ社会の研究——植民地状況とメンシズ』紀伊国屋書店 一九八三年に記述があった。また、『征服以来のインディオの反乱の個別的な例については、ワンカール著、吉田秀穂訳『先住民民族インカの抵抗五百年史——タワラント・インディオの闘い』、新泉社 一九九三年に詳述されている。

(9) ペルロー近現代史の『Taki』Ortega, op. cit., Pa-

blo Macera, *Visión Histórica del Perú*, Editorial
Milla Batres, Lima, 1968., Luis Martín, *The King-
dom of the Sun*, Charles Scribner's Sons, New York,
1974. 450頁 460頁。